寅さんが生きづらい時代

寅さんが生きづらい時代

文化

「男はつらいよ」50年で新作 山田洋次監督に聞く

日本、寛容さを失う

写真は日本経済新聞 12 月 14 日朝刊文化欄。リードから―高度経済成長まっ盛りの 1969 年の第 1 作から 50 年。シリーズ第 50 作「男はつらいよ お帰り寅さん」が 27 日公開される。寅次郎は旅から戻らず、周りの人々はそれぞれに年をとった。令和の寅さんに何が映ったのか。山田洋次監督に聞いた。

山田監督の示唆に富む発言を抜粋して紹介したい。

「今の時代はいかに人々が孤独に生きているかということじゃないかな。50 年前に比べると、この国は住みづらく、寂しくなった。そんな時代になってしまったという感慨が僕にはある。50 年前の日本人は今より幸せだったんじゃないかな」

「自問しなくてはいけないね。今、幸せなのか。コンピューターの時代で幸せなのか。人間より賢い AI が登場するけれど、それは素晴らしい時代が来ると考えていいのか。それは恐怖かもしれない。50 年前は未来にもっと期待していた。一生懸命に働けば、車が買えて、カラーテレビが買えた時代だよ。69 年は」「トランプ大統領は米国第一だけど、寅というのは自分の幸せは最後にする人間でしょう。まず俺が幸せになるということをまったく考えない。俺は最後でいい。目の前に不幸な人がいたらその人を助けるのが第一だというふうにして、生きてきた。そういう寅さんが生きづらい時代になっている。そういう人間の値打ちを認めるという価値観が希薄になっている」

「寅さんがヒットしていたころの映画館は騒々しくてね。たばこや酒のにおいはする。終夜営業の 3 本立てなんて、お客は騒ぎながら見ている。『いいぞ！』なんて叫んだり、グーグー寝てたり。僕はそういう雰囲気で見てほしいと思う。いつのまにか行儀よくしなきゃいけません、人に迷惑かけたらいけません、みたいになっちゃった。人に迷惑をかけたっていい、というのは理屈として通らないわけだ。そりゃ迷惑かけない方がいいにきまっているんだけど、多少の迷惑は『まあしょうがないね』と言って許すという寛容さが消えている」「大きな音で食べないでとか、前の席を蹴らないでとか、小学生じゃないんだから、うるさかったら『うるさい、静かに見ろ』って言えばいい。もめたら仲裁する人が出てくる。それでいいはずなんだよ。人間関係って。それを全部お上の命令みたいに、決まり事にしちゃう。映画館だけじゃなくて、いろんな場所でいえるんじゃないかな」

「隣近所との付き合いも希薄になった。人間同士がトラブルを起こし、トラブルを解決する、その中で新たな人間としての愛情がわく。そんな経験が少なくなり、付き合い方が下手になった」「寅さんの家族みたいにしょっちゅうけんかしていれば、修復の仕方も知ってる。修復することを考えながら、けんかしているからね。人間関係についてのベテランですよ。今はそうはいかない」

（2019 年 12 月 18 日）